

シンポジウムⅠ 「今、早期教育を考える」

安藤寿康 (シンポジウムⅠ オーガナイザー)

【パネリスト】

榊原彩子 (一音会ミュージックスクール)

有路憲一 (信州大学)

松村暢隆 (関西大学)

【コメンテーター】

藤永 保 (お茶の水女子大学名誉教授)

榊原洋一 (お茶の水女子大学)

【オーガナイザー】

安藤寿康 (慶應義塾大学)

早期教育の是非をめぐる議論は昔からかまびすしいが、最近では英語教育の早期導入を巡る論争や、発達障害への早期介入プログラムの有効性に関する議論、「脳トレ」「脳科学」ブームに乗って商品化される多種多様な教材・玩具など、子どもを抱えた親たちを迷わせ、当惑させる多くの状況が起きている。本シンポジウムでは、早期教育を冷静に議論するため、早期教育に対して理論的、実証的な根拠を踏まえたアプローチをしている研究者に登壇いただいた。

■榊原彩子氏

「音感の発達を通して早期教育を考える」

早期教育の難しさは、乳幼児期が大人と根本的に違うことに加え、その時期内での変化の大きさ、そしてスピードから来ていると考える。例えば、絶対音感とは訓練なしに自然に身につく可能性が約0.2%と非常に稀な能力であるにもかかわらず、ある年齢では100%習得可能な能力である。ただし5歳未満で100%の習得確率も6歳になれば50%以下、8歳以降では0%と、その臨界期はシビアである。しかしこれはある能力が失われていく現象と考えるのではなく、相対的処理のステージに移行できたがための変化と考えるべきだろう。

■有路憲一氏

「認知神経科学から見た早期英語教育

——臨界期仮説を巡って」

早期英語教育を支える根拠の一つに、「脳は幼い頃は柔らかく、その時期(臨界期)に英語(第二言語)を学習すると、無理なく自然に獲得できる」があるが、この認知神経科学(脳科学)によるという根拠には重大な欠陥や解釈ミスがあることから、英語に臨界期があるとは言えないことを示す。また、成人後からの英語学習であっても、十分にネイティブレベルまで熟達できることを、実験により論証する

■松村暢隆氏

「才能教育から見た早期教育」

アメリカ等では幼稚園段階を含めて公立学校の通常学級で「才能教育」(gifted education)が実施され、学習の個性化を図ることで子どもの多様な才能を花開せようという教育がなされている。また、個人内で比較的得意を伸ばし、得意を利用して苦手を克服させるという教育の理念は、特別支援教育にも育児にも生かせる。才能教育を参考に、すべての子どもの個性を大切に伸ばす早期教育が望まれる。



いかなる教育も、その個々の営みに関してはいわゆる「一般論」が通用しない、一人ひとりの、その状況ごとでの、固有の判断が求められるものである。これは「早期教育」と、生涯発達の中の限定された年齢時期に限定した教育を考えるときでも、例外ではない。

今回のシンポジウムでは、絶対音感と臨界期、英語教育と脳科学、個性と多重知能と、その対象となる能力の焦点は異なるものであったが、とくに「臨界期」が全体を貫くキーワードで、一般に信じられている「この時までには学習しなければ一生手遅れ」という厳密な意味での臨界期の存在を示唆する科学的証拠は、絶対音感を例外としてなさそうであるという「一般論」が、豊富なエビデンスと共に導かれたかと思う。これはきわめて示唆に富む一般論だが、実はすでに安易な一般化を拒むメッセージが潜んでいる。

ヒトは教育的生物 Homo educans であり、一人ひとり固有の遺伝的素質を抱え、多様で変化に富む環境に適応するための方略を、教育を手がかりとした学習を通じて、一生にわたって構築し続けなければ生きることのできない種として進化してきた(という考え方はオーガナイザーの安藤が唱えようとしている仮説である)。厳格な臨界期が一般には存在しなさそうなのは、そもそもヒトがこのように、その生活史全般を通じて、それぞれの時期に生きるために必要な能力を学習し続ける必要性から説明されうると思うが、一人ひとり異なる遺伝的素質は、どんな事柄でも、いつでも、誰でも、同じように学べるようにはしつらえられていないということも、同時に予想される。だからこそ、多重知能という概念が必要となるのであり、また絶対音感の獲得に垣間見られる、特定の時期に特殊な局所的学習様式が存在するのだと思われる。そうすると「今こんなふるまい方をするこの子に、親の私はどのような教育

を与えてあげればいいのか」という、切実な個別の問題に何らかの示唆を与える知見を得るためには、この一般論にとどまって安穩としてはいられない現実直面する。

シンポジウムを企画する楽しさは、これまでに相互に出会ったことのない面白い研究をしている人たちを一堂に会わせて、交流の場を設定することである。今回、専門も性別も年齢も異なる話者に登壇していただいたことで、その目的はひとまず達成したといえよう。しかし本当に必要なのは、この機会を糧に、それぞれが次のステージに進むこと、その際、できればその新しい出会いが、互いに協力関係を結んで、これまでにない組み合わせから新たな創造を生むことである。登壇した研究者も聞き手の皆さんも、このシンポジウムを一つの里程碑としつつ、そこにとどまることなく、次の一歩につながることを願っている。

